

鎌倉僧医・梶原性全の医の倫理観

著者	関根 透
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	14
ページ	23-31
発行年	2009-04
URL	http://doi.org/10.24791/00000406



「鶴見大学仏教文化研究所紀要」第14号（平成21年4月）抜刷

〈公開シンポジウム〉「仏教福祉思想とその展開」

鎌倉僧医・梶原性全の医の倫理観

関
根
透

鎌倉僧医・梶原性全の医の倫理観

関根 透

梶原性全（一二六六―一三三七）は、鎌倉時代最大の僧医であるが、彼の人間像は未だ殆ど詳らかになっていない。彼は真言律宗の思円房叡尊（一二〇一―一二九〇）の弟子と言われ、良觀房忍性（一二一六―一三〇三）とは親朋であるといわれている。また、性全は著書として『頓医抄』五十巻と『万安方』六十二巻が知られているぐらいであった。この『頓医抄』において、梶原性全は自らの医の倫理観を示している。特に、第四十六巻においては俄か開業医に対する医の倫理を具体的に示している。しかし、十年後に著した『万安方』においては、一人息子・冬景を想う肉親の情が発露して、非倫理的な記載さえ見受けられるのである。その後、『頓医抄』は真言律宗の衰退とともに忘れ去られ、次代の医の倫理観の向上にはあまり貢献しなかったようである。

叡尊と忍性

西大寺中興の叡尊は、空海の遺誡「仏道に趣向せんには戒にあらずして、なんぞ到らんや」を讀んで、戒律を戒如から学び、真言律宗を興したものとされる。以後、戒律の実践と普及に専念し、女性の救済にも尽力している。更に、彼は殺生禁断を實行し、慈善的な救済事業を盛んに行った。叡尊の慈悲の心の具体的な顕現は、蒙古襲来に対する八幡大菩薩の祈願文にも現れている。「東風を以て兵船を本国に吹き送り、來人をそこなはずして、乗るところの船をば焼き失はせたまへ」と祈願している。つまり、敵の命をも救済しようとする心情が示されている。また、正元元年（一二五九）には、北条重時に招かれて、六十二歳の高齡にもかかわらず、鎌倉に下行している。その時、彼は『関東往還記 前期』で「衆生ノ為ニ益スル者有ラバ、縦工泥梨之炎焦カレテモ、餓鬼畜生之苦シミ困ルトモ、更ニ悔心有ルヘカラス。況ヤ老身ヲ顧ミテモ、況ヤ遠路ヲ痛メテモ構ワナイ」と述べ、大変な決意をして鎌倉に来ていた。更に、八十二歳という老齡の時にもかかわらず、宇治川の橋梁改修工事の際には、漁師から魚網や釣り針を集めて、宇治川の中洲に十三重塔を建て、その下にそれらの魚網などを埋めさせている。一方、生活の糧を失った漁師に対しては茶の栽培を奨励している。こうした叡尊のエネルギは『文殊師利般涅槃經』の「菩薩行」に起因している。文殊菩薩は信仰する者に無量の福を授けるが、信者の前には弱者に化身して現れるので、信者にとっては弱者を救済することができる、最大の菩薩行であった。

叡尊は、弟子の忍性を自分よりも慈悲深い人物であると『興正菩薩御教誡聽聞集』において述べている。「慈悲ヲ先トシテ一切アルベキニテ候。良觀房（忍性）ハ慈悲方過ギタト申テ、是レ偏ニ慈悲ノ故也」と彼は忍性を高く評価している。忍性の慈悲深さは、虎関師鍊の『元亨釈書』からも窺い知ることができる。そこには、奈良においてハン

セン病の患者に対して大いなる愛情を注いだ話が語られている。また、鎌倉では「此れ自り処処に療病悲田之院を構え、其れ桑谷療病所。二十歳の間に痊者四萬六千八百人。死者一萬四百五十人。活者五之四を踰えたり」と語られている。更に、『極楽寺縁起』にも「上人病人を養ひ治す。八福田の随一にして、最行の菩薩なり。故に、桑谷に療養所を構えて、病者を集めて治療を施す」とある如く盛んに菩薩行を實踐したのである。忍性は極楽寺境内で、病人や貧窮者の保護や救済に尽力し、更に馬のための病舎も建てている。馬病舎は古い極楽寺の図絵に描かれている。奈良においては、忍性は般若坂の北山宿で施浴や施粥などの慈善事業を盛んに行っている。そこには、現在忍性が菩薩行を行ったといわれる「北山十八間戸」が建っている。更に、忍性の慈悲を示す菩薩行は仁和寺南勝院にも残っているといわれる。その『十種の大願』には、「病気でない限り輿や馬に乗らない。孤独、貧窮、乞食人、病者、盲人や路頭に捨てられた牛馬にも憐みをかける。衆生が悪行に引かれたら、我一人の罪として、衆生に代わって苦を受ける」などが示されている。言葉だけでなく、僧としてこれだけの願文を實踐することは大変なことであったと思われる。これは、忍性が難波の聖徳太子建立の四天王寺の別当になつてからの願文であるからこそ、実践の意味を強く感じる。

梶原性全の人間像

忍性から大きな影響を受けた梶原浄観房性全も菩薩行に関心をもつていたと思われる。しかし、性全の人間像は、現在、殆んどわかっていない。梶原性全を知る最も古い資料は一六六三年に著された黒川道祐の『本朝医考』である。そこには、「梶原性全 何処ノ人カ詳カニラカニセズ也。曾テ鹿苑院義満公ニ仕テ医術ヲ施ス」とある。実は、彼は足利義満の時代には生きていないのである。一八一五年の中川壺山の『本朝医家古籍考』も「梶原性全ト云人 何レノ人カ詳ニセズ 本朝医考ニモ不詳何処人也 曾仕鹿苑院義満公ト云ヘリ」とあると記載されている。これは前資料

を踏襲したままである。三番目の資料は、一八七四年の浅田宗伯の『皇国名医伝』である。「僧性全。浄観ト号ス。梶原氏、自ラ和氣氏之族ト云フ。医ヲ丹波氏ニ學ブ。其ノ底蘊ヲ極ム」とあるが、梶原氏の流れが示されたぐらいである。明治時代になった一九〇四年に富士川游が恩賜賞に輝いた『日本医学史』で、性全の人間像を紹介している。「梶原性全ハ何人ナルヤヲ詳ニセズ伝ヘ云フ、和氣氏ノ族、浄観ト号ス、名医ノ称アリ、博覽強記、自カラ言フ、・・・萬安方、頓医方ノ二書ヲ成スト云フ」とある程度で、新出の記載はほとんど見られない。更に、最近の辞典等でも新しい記述は少ない。一九七四年の『世界人名辞典』では、「カジワラセイゼン 梶原性全、鎌倉時代の名医。和氣氏の一族と伝へらる。浄観と号し、医を丹波氏に学んでその蘊奥を極め、名医の誉があつた。・・・」とあり、性全（しょうぜん）をセイゼンと読んでいる。一九七九年の『日本人名大事典』では、「かじわらしょうぜん 梶原性全 鎌倉時代末期（14世紀の初め）の僧医。鎌倉幕府の名家梶原景季の子孫といわれるが、生没年を明らかにしない。・・・」となつてはいるが、生没年は未だ不詳であつた。

さて、梶原性全が「しょうぜん」と呼ばれ、生没年が明らかになるのは、一九八六年の石原明氏の『性全と著作』の出版以降である。生年は梶原性全の著作『萬安方』の各巻末に本人が示した年号と年齢から推測される。例えば、『萬安方卷第四十三』の巻末には、「嘉曆元年十一月十日重所清書也 冬景秘此書濟人兼身耳 性全（花押）六十一才」とある。また、「嘉曆二年正月一日丑刻於燭下拭老眼清書訖 性全 六十二才（花押）」とあり、逆算すると、一二二六年、つまり文永三年に誕生したことになる。没年は『群書類従』の「常楽記」に「建武四年丁丑 正月廿二日。梶原浄観他界。」との訃報記事があることにより、建武四年（二二三七）に死亡したことになる。

梶原性全は、金沢文庫に現存している「古文書第一四七八号」の資料には「それもかさをかきて候て、はたらきへく候を、をりふしにて、御つかひにも、まいらせぬへき物も、今は候ては、いよと申候物をまいらせ候。かもん殿の

御うちには、しやうくわんと申候ほうしくすしの、かさこうやくを、はらしまし候へ。」とあり、梶原浄観房性全は「ほうしくすし」（僧医）と呼ばれている。多分、膏藥を貼らせた人物は長井酒掃宗秀と推測されることから、梶原性全は身分の高い人物と親交があったと思われる。また、彼の著作『頓医抄』や『万安方』には庶民には入手不可能な資料が引用されている。中国から当時輸入されたばかりの『太平聖恵方』や『和剂局方』などの中国医書からの引用があるからである。性全は梶原家の流れを駆む家柄の高い人物であったとも推測される。更に、彼のひとり息子・冬景の名前は、「景時」、「景季」などの「景」の字も名門の梶原家との関係を匂わせている。従って、梶原性全は名門の梶原家の流れを駆む人物と考えられる。

『頓医抄』と『万安方』

『頓医抄』五十卷（一三〇四）は和文体で著された最初の医学書である。梶原性全は多分、法然の『和語燈録』、日蓮の『高祖遺文録』、道元の『正法眼蔵』、一遍の『和讃法語』などの和文体で著わされた宗教書が布教に大きな効果を挙げたことを知っていたと思われる。そこで、彼は俄か開業医のいい加減な治療や、報酬を専らにしている医師の姿を見て、この『頓医抄』を和文体で著すことの意義を感じたものと思われる。そこで、彼はこの医書を和文体で著したのである。『頓医抄』第六卷では「此書和字ナレバヨミヤスクサトリヤスシトテ、イタヅラニウチカサネテ置クベカラズ。常ニ開キテ病ノ形薬ノ功ヲ見弁マヘテ、シコウシテ病ニ向フベシ。則チ是性全之本意也」と、和文体にした彼の目的と倫理観が吐露されている。さらに、和文体に著した理由が『頓医抄』第八卷にも「此仮名カキノ趣キアマネク人ニ知ラセテ天下ノ人ヲタスケンカタメ也」と示されている。ここにも、性全の医の倫理観が示されている。彼は叡尊や忍性が文殊菩薩信仰を実践している姿を絶えず見ており、弟子として自分も人々の救済のために何かをし

なければならぬと思つたであろう。従つて、『頓医抄』の出版は性全の菩薩行の顕現であつたとも考えられる。

他に、『頓医抄』の特色として、隋や唐時代の医書、最新渡来の医書、仏典や民間に伝わる口伝や秘伝などからも引用されている。後述するが、梶原性全の「慈悲の心」が本書を通じてよく示されているように感じた。性全も叡尊や忍性と同様に真言律宗の僧であり、彼も多くの人々を救済しようとして『頓医抄』を著したものと推測される。なお、忍性は性全の朋友といわれるが、忍性は性全より遙かに年長である。

次に、『万安方』六十二巻は、『頓医抄』出版の十年後の正和三年（一一三二）に著された医書である。これは漢文で示され、庶民のための医書ではなく、病弱なひとり息子・冬景のための秘伝書である。従つて、倫理的な記載は全く示されておらず、親心が先行して、息子・冬景が『万安方』を使うことによつて生活の糧にできるようなとの配慮が見受けられる。各巻末には、「冬景秘之雖兄弟」（第二十二巻）、「可秘之々々々」（第二十四巻）、「冬景秘之雖為兄弟親朋不可容易披閱（第三十巻）」、「子孫深秘如至宝」（第四十九巻）、などの非倫理的な記載が示されている。また、息子に対する訓戒も、「勿倦為冬景重所書也」（第四十一巻）、「勿倦於医学」（第四十四巻）などと書かれている。「目次」に当たる「万安方総目」には、「十八 医師用心」と「十九 論大医習業」が示されているが、本来なら、そこに医の倫理が示されるべきである。しかし、そこには五臓六腑の経脈図がカラーで描かれていて、まったく医の倫理は示されていないのである。梶原性全は『頓医抄』で、あれほど万民救済のための医療倫理を説いていたにもかかわらず、『万安方』では、医師の使命感や医の倫理には全く触れていない。つまり、『万安方』の目的は喘息持ちのひとり息子の将来を心配して書かれた冬景のための秘伝書であつた。やはり、性全の子を想う肉親の情が大変深いものを感じた。従つて、『頓医抄』と『万安方』とは、その目的が全く異なつていた医書ということになる。

梶原性全の医の倫理観

梶原性全の医の倫理観は『頓医抄』に詳しく示されている。まず、『頓医抄』を和文体にした編纂目的に、彼の医の倫理観と本書出版の目的を見ることが出来る。先に述べたので重複するが、第六巻には「此書と字ナレバヨミヤスクサトリヤスシトテイタヅラニウチカサネテ置クベカラズ。常ニ開キテ病ノ形薬ノ功ヲ見弁マヘテシコウシテソラニ病ニ向フベシ。則チ是性全之本意也」と述べられ、さらに、第八巻でも「アル医書ヲミルニ此事ハナハダ大事也。大ナル口伝アリ。コレ秘事トモイフベケレドモ此仮名カキノ趣キアマネク人ニシラセテ天下ノ人ヲタスケンガタメ也」と述べている。彼は全ての人を救済したいと考えて『頓医抄』を著したのである。また、彼が和文体にした意味を第三十六巻に、次のように述べている。「本書ヲ我トヒキ見ザラン人ハ容易ニ知ルベカラズ。故ニ一度ハ知ラザル人ノ道ヲコノマンタメ一度ハ利益ヲ思テ是ヲノス。此ノ頓医方ノ趣ハ偏ニ此ノ心ニ依テコレヲシルス」とある。

梶原性全は『頓医抄』の第四十六巻は「医師要心」として性全自身の医の倫理観を詳しく展開している。まず、この冒頭には『千金方』の「論大医精诚第二」、張湛の言葉を引用して「張湛云フ。夫諸々ノ医方広ク深クシテ本ヨリ委シガタシ。・・方ヲ読ム事三年シテ、則チ天下ニ病ノ治スベキヤウ無シト思エリ。病ヲ治スル事二年ニ及ビテ、則チ天下ニ方ノ用ユベキヤウ無シト云フ。・・故ニ、医者ハ必ず須ラク広ク医ノ源ヲ究メ精勤ニシテ怠ルベカラズ」と、医学の蘊奥の深さを説いている。

次に、梶原性全は「慈悲の心」や「仁の心」など、患者に対する親切心について説いている。「凡ソ大医ノ病ヲ治セン事、必ず正ニ神ヲヤスウシ志ヲ静ニシテ、求メ欲スルコト無シテ、先ズ大慈惻隠ノ心ヲ発シテ普ク含靈ノ苦ヲ救ケント誓願セヨ」と大きな慈悲心と惻隠の情から彼の医の倫理観を説いている。また、同じ第四十六巻の最後の方で

は「慈悲ノ心ヲ以テ行ハバ、縦ヒ其ノ藥拙シトモ皆効アルベシ」とか、「欲心不仁ニシテ学バセバ、千書万方ヲ明メ、無尽ノ妙藥ヲ施ストモ其ノ効シアルベカラズ。天其ノ術ヲ惜ム故也」と述べ、俄か開業医に医の倫理を説いている。また、「慈悲アリテ人ニ益ヲ施セバ、自然ニ運ヲ開キ」とか、「慈悲ノ心ヲモツテ人之苦ヲ救ハント」と「慈悲の心」を説く一方で、医の倫理は「忠恕ノ道」と捉えて、当時の俄か開業医が行つてゐる医業は「病者之富貴ナルヲモツテ珍貴之妙藥ヲ出テ、求メカタラシメ、自己ノ効能ヲ輝ス事ナカレ。是誠ニ忠恕之路ニアラズ」と述べ、「仁」の道でないと教えている。その直後に「当道ノ肝要ト存スルバカリ也」と結んでゐる。このように、性全は僧医であるために、仏教精神の「慈悲」を重んじ、「慈悲」については再三触れ、医の倫理の重要な精神と捉えていたようである。

梶原性全は日頃の医学の研鑽の大切さも、医の倫理として捉えていたようである。第六卷では、「深ク是ヲ弁ヘテ病ニ向ヒテ治ヲホドコセ。病ヲミテ後ニ書ヲ開カバ則チ軍サニノゾンデ矢ヲ作ルニ似タラン。聖恵方ニ云、凡医者ハ造次（危急の時）モ医ニオイテシ顛沛（ころんでつまずいても）ニモ医ニオイテセヨ。常ノ人ハ波瀾ヲ同スルコトナカレトイヘリ。則チ此心ナリ」と述べ、医師は日頃の研鑽が大切であることを説いている。

性全は「医は算術でない」ことも説いている。第八卷では「ヨノツネノ医師ノ或ハ利潤ヲ専ラニシテヤスキ事ヲカクシ或ハ偏執ヲサキトシテ益アル事ヲ秘ス。コレハナハダ天ノ心ニタガヒ人ノ身ニ益ナシ」と述べて、彼はこの『頓医抄』で秘事や口伝もすべて示したので、利潤を専らとする俄か開業医を戒めている。

更に、彼は患者を区別せず、平等に診なければいけないことも説いている。これはヒポクラテスも同じようなことを説いているように、医療倫理の基本精神である。第四十六卷には、「若シ病有テ来テ治方ヲ求ムル者アラバ、其ノ貴賤貧富長幼妍醜怨親善友花夷愚智ヲ問フコトナク、普ク一等ニ至親ノ想イヲ成スベシ」と述べ、患者を差別してはいけないと教えている。当時の状況を考えると画期的な倫理観であると思う。

また、医療倫理を實踐した立派な先人の医師として和緩、扁鵲、蒼公、花陀、孫思邈を挙げている。これらの医師は「ツラツラ是（医術）ヲ思フニ古人ハ是ヲモツテ人ヲ救フ。故二天其ノ道ヲ与ヘテ普ク人ヲ救ハシム。今ノ人ハ是ヲ以テ利ヲ求ム。故二天其ノ術ヲ惜テ与エズ。故ニシルシナシ。実ニ疑イ無キ者ナリ」と述べている。更に、「縦へ一旦効アリト云フトモ、ヒソカニ天ノ罰ヲ蒙ルベシ。何ニ況ヤ賤キ業ヲ合セテ珍ラシキ名ヲ付ケ易ヘテ人ヲ誑カシ与ウ。誠ニイマシムル所ナリ。況ヤ出離生死ヲ心ニカケ後生ヲ思ワントセン人能々正心ニ住シテ是ヲ成スベシ。モツテ渡世ノ計略ニアテント思ハンユシキ罪業ナリ。恥ベシ恥ルベシ恐ルベシ」と説いて、医の倫理に悖る行為は人間としての良心に恥じることであり、神罰が当たるかもしれない恐ろしい行為であると結んでいる。

まとめ

鎌倉時代は武士の時代であり、蒙古襲来以来、社会は疲弊し、混沌も極度に達していたと思われる。利潤や出世を専らとする俄か開業医に対して、梶原性全は医療の本質を説き、医療知識や技術を和文体で示し、更に医師のあるべき姿として医の倫理を説いた点では、当時の俄か医師に与えた影響とその意義は大変大きいと思う。しかし、この『頓医抄』は後世に与えた影響は不明であるが、真言律宗の衰退に関係があったかもしれない。つまり、鎌倉時代以後の医書には『頓医抄』からの引用はほとんど見られないからである。市野迷庵という個性ある人物が性全の著作を所持していた点にもあるといわれている。また、梶原性全の人間像が長く詳細が詳らかにされなかった点からも、後世に影響を与えていなかったとも推察できる。しかし、叡尊や忍性が庶民の生活に与えた菩薩行は計り知れない影響を与えている。